

## 発音に問題のある子どもの構音障害について知ろう

### はじめに

当センターでは、歯科治療のほかに、ことばと聞こえとコミュニケーションの評価・訓練（支援）などの言語聴覚療法を行っています。言語聴覚療法の相談で多いのが「発音」に関することで、中でも成長過程による発音の不明瞭さ（**構音障害**）についての内容が多いです。子どもの構音障害は、舌（ペロ）や口蓋（上あご）などの形態に異常が認められるものと、認められないものに分けられます。今回は、相談の多くを占めるお口の形態に異常がない構音障害について紹介します。

### 1 構音の発達と子どもにみられる構音の誤り

#### ① 日本語の発音と発音をつくる場所

日本語の音は、「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の母音とそれ以外の子音で成り立ちます。肺から出た空気の流れ（吐く息）が、声帯を通り、口で発音が作られます。発音を作る身体の部位を**構音器官**（図1）、作られた音を**構音**と呼びます。

構音の中で、母音は、唇のすぼめ具合、舌と口蓋の距離（舌の高さ、前後）で音が作られます。一方、子音は声帯を通った空気の流れを、舌や唇の細かい動きによって、遮断したり狭めたりすることによって作られます。このような吐く息の妨げが起こる場所を**構音点**（図2）と呼びます。例えば「ば」は、吐く息を上唇と下唇を閉じてせき止めた後に、一気に吐き出すことで作られます。

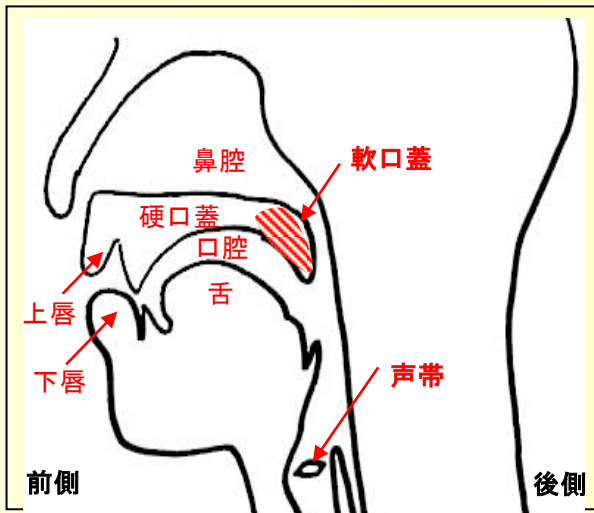


図1 主な構音器官（顔を横から見た図）

#### ② 構音の発達と発達上の音の誤りについて

子どもの構音の発達には順番があり、母音の完成が約3歳、子音の完成が5~7歳といわれています。子音には、早期に獲得される音と獲得が遅い音があります（表1）。子どもの構音が完成するまでには、後期に獲得する音が早期の音になることがあります（**未熟構音**）これらは発達途上の音の誤りなので心配いりません。

（例：「さ」が「た」になる。）

また、子どもがことばを習得する過程で、「エレベーター」が「エべレーター」になるような音の入れ替わりがみられることがあります。これは構音の誤りではなく音の配列の誤り（**音韻認識**）であり、ことばの発達に伴い自然に消えるといわれています。

未熟構音や音韻認識は個人差がありますが、5~6歳で消失するといわれています。

- 「ば」：上唇と下唇
- 「た」：前歯の裏
- 「ひ」：硬口蓋（上あごの前方）
- 「か」：軟口蓋（上あごの後方）

図2 構音点の例

早期（4歳まで）に獲得する音	母音、や行、わ行、ま行、な行、は・ぱ・ば行、た・だ、ち・ぢ、て・で、と、ど、か・が行
後期（4歳以降）に獲得する音	さ・ざ行、つ・づ、ら行

表1 構音の獲得年齢

## 2 構音の評価

はじめに子どもの現在の発達とことばの状況を確認します。次に、発音の検査を行い、子どもの構音を聞いたり、舌の力の入り方や動きを見ます（**構音の評価**）。その後、評価に合わせたプログラムを立案します。



図3 舌を左口角へあてる



舌の左右の口角（口の端）にあてる動き（図3）や、あっかんべーをして力の入る部分を確認します。

舌の先に力が入っている状態です（図4）。舌の力を抜く練習が必要です。



図4 力が入っている部分

**訓練の適応**：子どもの発達年齢、音の誤り方、本人の自覚などを総合的に判断

（一定の時間相手に応じるコミュニケーションの力、しりとりあそびなど音を区別してとらえる力が必要）

**訓練開始年齢**：後期に獲得する子音を学習し、構音の発達が完成した後、発達年齢が5～6歳が望ましい

## 3 構音訓練の実際（さ行）

「さ行」の講音訓練の実際について紹介します。

「さ行」の発音は、舌に力が入っていない状態で、舌の中央に吐く息が細く流れることで作られます。「さかな」が「たかな」になる場合、舌の力を抜き、歯肉（歯ぐき）と舌の間に隙間をつくるのが目標となります。訓練は、舌を下唇くらいまで出して母音を言いながら舌の力を抜く練習から始めます。次に、細く息を出す練習と息と母音をつなぐ練習を行ない、正しい音をつくる舌の動きに近づけていきます。

訓練頻度、期間、方法は一人ひとり異なります。子どもの発音の状態にあわせて、言語聴覚士がプログラムします。

- ① 舌の力を抜く練習
- ② 舌を出して息を出す
- ③ 舌の上にストローを置き、ストローから息を出す（図6）
- ④ だんだんストローを抜く
- ⑤ 息の後に母音を言う
- ⑥ 息と母音をつなげ早く言う



図6 ストローを使った「さ行」の練習

図5 訓練例

### 構音の発達に大事なこと

唇や舌の動きは、食事の時の動きに関連しています。食事で口と舌をしっかり使うことは、きれいな発音につながる毎日行えるトレーニングです。（センターでは、食べることや飲み込むことに悩みがある方への指導（摂食嚥下機能療法）も行っております。）

構音訓練は一定期間の地道な練習が大切です。子どもが楽しみながら訓練に取り組み、正しい発音でコミュニケーションを楽しめるよう言語聴覚士がお手伝いをさせていただきます。発音に関して気になることがありましたら、どうぞお気軽にご相談ください。

#### 【参考文献】

改定 機能性構音障害 建帛社  
特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と支援 学苑社